

## ラリー・コフランのキャリア理論（その2）

野 淵 龍 雄

On Larry Cochran's Theory of Career (Part 2)

Tatsuo NOBUCHI

### はじめに

本稿のねらいは、「ラリー・コフランのキャリア理論」（梶山女学園大学『人間関係学研究』第2号，2004年3月発行，93-99，所収。以降、『前稿』という）を引き継ぎ，コフランのキャリア理論の核心であるボケーションの精神の構造とその精神を涵養する方法としてのナラティブ・アプローチについて一層の理解を図ることにある。

『前稿』では，コフランのキャリア理論を構成する基本要素である「ストーリーとしてのキャリア」「人生の4つの相」「キャリア・プロジェクト／ボケーションとしてのキャリア／パースンフード」「キャリア・カウンセリング」等の意味を明らかにしながら，コフランのキャリア理論が，キャリア理論の分類学上，伝記的アプローチ／解釈学的アプローチ／ナラティブ・アプローチに分類できる，と指摘した。

これを受けて本稿は，「ボケーションの精神の形成と涵養」「理解の方法としてのナラティブ・アプローチ」「ストーリーの共著者として」「青年期における意思決定の了解性」といった角度からコフラン理論に光を当てることにしたい。

### 1. ボケーションの精神の形成と涵養

コフランが「ボケーションの精神」（A Sense of Vocation）を発見したのは，パウロ，アウグスチヌス，ミル，J. S. といった歴史上の人物についてのライフヒストリー研究と現代人の症例（ケース）研究を通してであった。ここでコフランが着目したのは，これらの人物の生涯は，ボケーションの精神の生成・発展という視点から見ることによって初めてその意味が真に理解できるという点である。

コフランのいうボケーションの精神とは，端的に言えば，職業への専心，全心傾注，使命感のことであるが，コフランに特有な点は，この精神が個々人の優勢な性格特性であるパースンフードと，これを生きる意味の形で表現したライフ・テーマを元型として形成される，とみていること（この点コフランは，好んで，ボケーションはパースンフードまたはライフ・テーマのメタファーであるという言い方をしている），従って，ボケーションの精神を涵養するためには，優勢な性格特性の発現と個々人に最適なライフ・テーマの設定がひとつの焦点になるとしていることである。

『前稿』で指摘したように、人生はひとつのサイクルである。そして、人生のサイクルは「4つの相」（「不完全」「ポジショニング」「ポジティング」「完結」）のサイクルとして捉えることができるということであった。しかし、今や、人生はボケーションの精神の生成・発展の過程であるとみるのであるから、各「相」（Phase）もまたその位相として以下のように捉え直さなければならないであろう。

「不完全の相」は、ある事柄に欠乏、不均衡、不完全な状況が生まれ、これらが動因・原因となってある行為が生ずる相であるが、その行為は多くは現実的でなく、一貫性や持続性もなく、不安定である。夢や理想、願望や欲求が支配的な相であるといっていよい。一方、優勢な性格特性であるパースンフードは未だ潜伏しており、その発現を待つ時でもある。

「ポジショニングの相」は、夢や理想、願望や欲求等を方向づけ、いわば姿勢制御を図る時である。パースンフードを発現させ、ライフ・テーマを設定し、アイデンティティを確立し、ボケーションの精神を形成・涵養する時なのである。従って、「不完全の相」にあっては未完なもの、不完全なものが前景、優勢なものが後景に退いていたのであるが、この相にあっては優勢なものが前景に、未完なもの、不完全なものが後景に位置取りされて、図と地の位相が逆転する。

「ポジティングの相」は、「ポジショニングの相」で発現し、優勢となったパースンフード、ライフ・テーマ、ボケーションの精神を現実の職業において実現し、これに専心没頭、全心傾注し、職業人として自己実現を図る時である。

「完結の相」は、文字通り、人生のライフサイクルを完結させる時である。ボケーションの精神の完結を体験し、充実感と満足感、完全性を実感する時であるといっていよい。しかし、この相に至った人でさえ、更なる完結の在り方を願って再び「不完全の相」に還ることも稀れではない。否、むしろ、「完結の相」は人生のサイクルとしては意味乃至意味パターン自体が意味づけられるというメタパターンの構造を持つが故に、反省や評価といったプロセスを経ながら「不完全の相」に戻るのが一般なのである。

かくして、「不完全の相」から「完結の相」に至るボケーションの精神の形成・涵養のプロセスは、最後の「完結の相」に至ってかのキャリア発達理論の見解と劇的に対極的な位相を呈してくることがわかる。というのは、コフランがいうように、ボケーションの精神に衝き動かされて生きている人は、「完結の相」に至ってもなお意欲的、前進的な生き方を止めることがないのに対して、「キャリア・エシック」（人生上の様々な役割取得の在り方やスタイル、また、職業上の経歴移動に高い価値づけをする生き方）に生きる人は、キャリアの発達段階上（成長－探索－確立－維持－下降－衰退）、「下降」段階に達すると、キャリア発達を下降させ、自然とキャリアからの離脱や引退を準備し、それを自らの“発達課題”とするほかないからである（コフラン、1990、188-191；スーパー、1980、282-298；サヴィカス、1993、205-215；及び本稿末の「対比表」を参照）。

## 2. 理解の方法としてのナラティブ・アプローチ

サヴィカスは、コフランの1997年の著作“career counseling : A Narrative Approach”は、真にパーソナルな側面からキャリア・カウンセリングの“理論”を構築した最初の書であるといってい同書を絶賛している。ここでのサヴィカスの評価は、もっぱら、コフランがキャリア・カウンセリングを「クライアントがストーリーの中に自らを投げ入れ、自ら為すべきことを創造するのを助ける過程である」と定義づけたことに向けられている（コフラン、1997、V－VII）。

ここで、個人のパーソナルな世界を理解する方法としてのナラティブ・アプローチの特質（物語的特質）について改めて押さえておく必要がある。

まず、ブルーナーによると、「パラダイムの思考」が論理的形式やシェーマを用いて真実を追求する思考方法であるのに対して、「物語的思考」は、事象の「迫真性」という真実を明らかにする思考方法であるということであった（ブルーナー、1986、11-19；及び『前稿』を参照）。

次に、ボルキンゴーンは、ナラティブはストーリーであること、その方法は人間の経験の意味、個人の生きる意味（Person in Meaning）を了解するのに最適な方法であるとしている（ボルキンゴーン、1988、1-18）。

コフランもまた、キャリアについて語ることはストーリーを語ることであり、ストーリーを語るのは、それが“意味”を生成するからであるという。この観点からコフランが強調するのはストーリーの持つ以下の3つの特性である（コフラン、1997、4-8）。

- ストーリーには「始まり」「中間」「終結」というサイクルがある。
- ストーリーには幾つかのプロット（意図、計画）が含まれている。
- ストーリーには幾つかのプロットを統合するより大きなプロット、または示唆的、教訓的なプロットが含まれている。

ナラティブ・アプローチによって進められるキャリア・カウンセリングでは、ストーリーの持つ上述のような特性が十分に発揮されなければならない。コフランがいうように、そのことを可能にするのがストーリーの中に自らを“投げ入れる”（emplot）クライアントの側の主体的な行為であり、クライアントが語るそのストーリーが意味を生成するように働きかけるカウンセラーの側の配慮である。コフランは、好んで、カウンセラーはクライアントが語るストーリーの共著者であれ、といったことが、そのことの意味もこうした文脈の下においてこそ理解されるべき事柄であろう。

### 3. ストーリーの共著者として

キャリア・カウンセラーは、もはや或る賢者の如く賢明な選択の道や解決法を直接クライアントに示すことはしないであろう。カウンセラーは助言者として、洞察力に富み知恵のある助言者として、クライアントが自ら問題を解決するのを助けることができるだけである。このことをコフランの上述の定義に即していえば、カウンセラーはクライアントが語るストーリーに耳を傾け、クライアントが自ら為すべきことを創造するのを助ける、ということになる。コフランはこのことを比喩的に、カウンセラーはクライアントが語るストーリーの共著者であれ、共同制作者であれ、というのである。

ストーリーを“共著すること”（Coauthoring），“共同制作すること”（Coconstruction）の真意についてはなお精査する余地があるが、ここでは、彼のライフヒストリー研究や症例（ケース）研究から窺い知れることを以下の4点にまとめて示しておきたい（コフラン、1990、133-151；コフラン、1992、187-198；コフラン、1997、147）。

#### ①問題を洗練し、明確化すること。

クライアントの問題を明確化するためには、そのための様々な技法（観察記録、諸検査・テスト、価値明確化法、キャリア成熟・発達尺度等）を活用することも必要であるが、何よりもクライアントが語るキャリア・ナラティブに耳を傾け、そのストーリーの文脈の下で問題を洞

察・洗練 (elaborate) することが大切である。

②マッチングよりもエンプロットメントを重視して。

ここで、“エンプロットメント” (Emplotment) とは、キャリア・ナラティブを語ることにクライアント自身が“自己投入” (self-invest) することであり、マッチングよりも重視されなければならない。何故なら、マッチングの技法は、個人の能力・適性等と進路との正確な一致を最重要課題としているが、これのみに依存するとクライアントが自らを語る能力を“自己剥奪” (self-divest) することになりかねないからである。

③アイデンティティを獲得して。

アイデンティティは、ここでは、個々人が全心傾注、専心できる対象としてのボケーション乃至ボケーションの精神の実現を意味している。アイデンティティの獲得は、その人の生き方における一貫性、全体性、調和性といった資質の実現でもある。一貫性は、価値観等が時間を超えて同一性を保っていることを、全体性は、その人に中心となり核となる価値観や資質があって人として統合されていることを、また、調和性は、人として、従ってまた、その人が語るストーリーとして無理や偏りがなく、バランスが取れていることを指している。

④ライフヒストリーを語ること。

ライフヒストリーは個々人の生涯の歴史であるが、そこにはその人にとって意味のある出来事や人生経験、エピソード、スクリプト、筋書き等が含まれていなければならない。ここで、コフランが重視するのは、“あるべきこと”と“あること”の間、理想と現実の狭間に生ずる意識の揺れであり、その間のズレ、ギャップ、落差等であり、個々人がそれらをどのように見、考え、どのように克服、解決しようとしたか、その経験的事実であり、心理的現実であり、従ってまたそのストーリーなのである。

#### 4. 青年期における意思決定の了解性

青年期は児童期から成人期に至る間の単なる移行期ではない。それは「ポジショニングの相」の課題を背負って生きる自己形成過程の真っ直中にある（「ポジショニングの相」はライフサイクルのどの時期にも出現する可能性のある相であるが、この相の特質が最も顕著に現れるのが青年期であるから、「ポジショニングの相」は一般的に青年期の相に該当すると考えてよい）。

「ポジショニングの相」の課題は、優勢な性格特性であるパースンフッドを発現させ、これを生きる意味が凝縮したライフ・テーマとして生成し、さらにこれらを基盤にしてボケーションの精神を涵養する、という一連の課題から成るものであった。ここで、これらの課題の多くが青年の生き方を左右する程の重要な意思決定を含んだ課題であるという点に注目したい。実際、青年は“意思決定” (Decision Making) することによって自己を規定し、自己規定しつつ自己を形成していく、という意味構成的な生き方をしているのである。ここで、コフランが提起するのはこの意思決定の了解性という問題、青年が行う意思決定は何によって良しとされるのかという問題である。これこそ青年の生き方を左右する実体であるからである。

“了解性” (Intelligibility) は“知恵” (Wisdom) のようなものである、とコフランはいう。この知恵は、カウンセラーはもちろんのことクライアントも獲得しなければならない。否、むしろ、両者が協力することによって初めて得られるものかも知れないのである。

ところで、青年が“あるべきこと”と“あること”の間を生きる存在者であるということは、意識の揺れやズレ、悩みや問題、あるいは認知上の不協和等を日常的に経験しているということである。その意味では、青年はなお前の相である「不完全の相」を引きずって生きてい

るともいえる。しかし、この“間”を生きるということから生ずる諸矛盾は、青年期特有の「ポジショニングの相」の課題、パーソンフッドの発現からボケーションの精神の涵養に至るまでの諸課題に向き合い、了解性のある意思決定をすることによってしか解決することができないのである。

しかし、このことは、青年が単独者としてはなお“途上の人”“成りつつある人”であるため簡単ではない。青年はしばしば彼が生きる社会や文化の支配的な価値観（文化的プロット）にとらわれるかと思うと、彼が実現したいと考えるライフ・テーマやボケーションを発見していながら、それを親や教師など周囲の人に開示することを躊躇することがある。また、将来の進路の選択において、それが好きであるから、興味・関心があるからといったその人の特性による選択理由も、それ自体に意味が無いわけではないが、これだけでは“あるべきこと”と“あること”の間を埋めるには不十分な場合が多い。いずれにせよ、これらの事態は、青年のこうした意思決定がそのままでは了解性を得ることが難しいことを暗示している。

コフランは意思決定の了解性はストーリーとの調和性にある、と考えている。ストーリーとの調和性とは、ストーリーの持つ文脈やプロットから見てその意思決定に整合性があるかどうか、ストーリーに含まれている主要な意味乃至意味パターンから見てその意思決定が目的であるかどうか、見通しやパースペクティブがあるかどうか、といったことを指している。ここで、ひどく制約のあるストーリーは書き直し、語り直さなければならないから、意思決定の了解性は、青年が行った意思決定が真に書き直しや語り直しになっているかどうか、ということでもある。さらに、一步踏み込んで言えば、意思決定という行為は「もつれた糸を断ち切る」（コフラン、1991、17-25、138-146）行為でもある。そして、“断ち切る”（the cutting）ことによってストーリーの一貫性、調和性、全体性が回復されるとすれば、そのような意思決定こそ了解性のある意思決定であるといえるであろう（コフラン、1991、17-25、138-146；ポルキンゴーン、1988、182）。

## 結びに代えて

既述の通り、コフランが発見したボケーションの精神を生きる人間とは、選択した職業に専心没頭し、それに全心傾注して生きる人間のことであった。このような人間乃至人間像は、資本主義社会など特定の社会経済的状況下の人間の研究によってではなく、むしろ、時代を超えて選ばれた歴史上の人物と症例（ケース）研究で取り上げられた現代人を対象とする生きる意味の探求という人間学的研究を通して発見されたといえる。従ってまた、ボケーションの精神を生きる人間は、特定の職業や社会階層に制約されたものでもなく、職業一般、人間一般において実現されるひとつの人間類型として提起されているのである。

しかし、もちろん、人間存在として社会的経済的状況から、文化的プロットから自由であることはできないであろう。コフランもまた、状況に制約されて生きざるを得ない人間模様について多く語っているが、彼がより多く注意を向けたのは、そうした状況を自らのストーリーの中に取り込み、意味づけ、解釈していく人間の生き方そのものであった、といえよう。あるいは、コフランは“意味に生きる人間”（Person in Meaning）の“意味”を探求することにより大きな関心を払った、といってよいかも知れない。特に筆者が注目したのは、コフランが描いている優勢な性格特性であるパーソンフッドの発現からボケーションの精神の形成・涵養に至るまでの人間の意味構成的な生き方である。また、このような生き方が青年期にひとつのピークを迎え、臨界に達し、従ってまた、青年の意思決定とその了解性が一層重大な意味を帯びて

くる、という彼の見解である。この間の事情は、“ボケーションは意味に満ちている” “パーソンフッドとライフ・テーマのメタファーがボケーションである” “ボケーションの元型がパーソンフッドである” といった彼のレトリックによく表現されていることでもある。

だからといって、我々はパーソナリティ理論に帰るべきである、などといっているわけではないであろう。我々がもっと留意すべきなのは、コフランが指摘するように、青年を意思決定の了解性を契機として意味構成的に生きている人間存在として捉え直すとともに、青年が語るストーリーの共著者として最大限に必要な配慮をすることだからである。

## 参考文献

- Bruner, J. (1986), *Actual Minds, Possible Worlds*, Harvard University Press.
- Cochran, L. (1990), *The Sense of Vocation : A Study of Career and Life Development*, State University of New York Press.
- Cochran, L. (1991), *Life-Shaping Decisions*, Peter Lang Publishing Co.
- Cochran, L. (1992), *The Career Project*, *Journal of Career Development*, Vol. 18(3), Spring.
- Cochran, L. (1997), *Career Counseling : A Narrative Approach*, SAGE Publications Inc.
- Polkinghorne, D. E. (1988), *Narrative Knowing and the Human Sciences*, State University of New York Press.
- Savickas, M. L. (1993), *Career Counseling in the Postmodern Era*, *Journal of Cognitive Psychotherapy, An International Quarterly*, Vol. 7., No. 3.
- 仙崎 武 (2001), わが国の進路指導及び相談研究への D. E. スーパーの貢献, 文教大学教育研究所紀要第10号, (63-67).
- Super, D. E. (1957), *The Psychology of Careers*, Harper and Row Publishers.
- Super, D. E. (1980), *A Life-Span, Life-Space Approach to Career Development*, *Journal of Vocational Behavior*, Vol. 16.
- Super, D. E., Savickas, M. L. and Super, C. M. (1996), *The Life-Span, Life-Space Approach to Careers*, In Brown, D., Brooks, L. and Associates, *Career Choice and Development* (3rd ed.).

対比表 キャリア発達に関するコフランとスーパーの見解

内容項目	コフラン	スーパー
自己，自己概念， パースンフード	パースンフードはその人の優勢な性格特性であり，ライフ・テーマの元型となるものである。自己概念に代わってセルフコンセプトのコンセプトであるライフ・テーマが重視される。	自分自身についてのイメージである自己概念を発達させることが焦点となる。
人間像	ライフ・テーマを追求し，ボケーションの精神を実現する人間。	環境の変化に対処して，うまく適応・調節しながら生きていく人間。
生涯発達 (Life-Span Development)	パースンフードからライフ・テーマへ，ライフ・テーマからボケーションの精神の実現へと展開する生涯。生涯発達の過程は事実上，不完全—ポジショニング—ポジティブ—完結のサイクルとして理解される。	成長—探索—確立—維持—下降，と推移する自己概念の発達の過程であり，自己概念の表現であるライフスタイル，ライフサイクルの実現の過程でもある。
キャリアの概念	キャリアの真髄はボケーションである。	人がその生涯を通して取得する様々な役割の結びつきとその連鎖としてのキャリア。
キャリア・カウンセリング	ストーリーの共著者であること。ストーリーとしてのキャリアを解釈するのを助けること。	自己概念を発達させ，これを修正，調節するのを助けること。

参考文献：コフラン，L. (1990, 1991, 1992, 1997)，スーパー，D. E. (1957, 1980, 1996) 及び仙崎 武 (2001)。